

N・ルヴァン、D・レイ＝フルマン共編

『声の人類学のために』

川田順造

近年、声、かたり、口頭性をめぐる研究が、内外でさかんに刊行されている。文字や書記性、"よむ"行為などとの対比でなされた研究も多い。比較的新しく日本語で発表されたか日本語に翻訳されたもので、いま偶々私の手許にある単行本のいくつかを順不同で拾つても(従って少しも網羅的ではなく、これ以外にもその他すぐれた研究がある)とはい

八八)ロジエ・シャルチエ編「水林草他訳『書物から読書へ』(みすず書房、一九九二)、小峰和明著『今昔物語集の形成と構造(補訂版)』(笠間書院、一九九三)、坂部恵著『かたり』(弘文堂、一九九〇)等々。私も『聲』(筑摩書房、一九八八)『口頭伝承論』(河出書房新社、一九九二)等を発表したし、私たちの日本口承文藝學會でも、大会のシンポジウムで「うたとかたり」(一九八八年、松江)、「文編、今村仁司監訳『声』(リブロポート、一九八八)、ウォルター・J・オング著、桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』(藤原書店、一九九一)、兵藤裕己著『王權と物語』(青弓社、一九八九)、赤坂憲雄編『物語』(新曜社、一九九二)、藤井貞和

『音声学的試論』Ivan FONAGY *La vive voix: à la poésie orale*, Paris, Payot, 1983)、中井史孝著『一ヘル・ズムーネのいう回路』(新曜社、一九九二)、藤井貞和『おもいおひがね』は歌う歌か』(新典社、一九九〇)、ロベール・マンドレー著『宮宏之他訳『民衆本の世界』(人文書院、一九九〇)、『文字の壁』(La lettre et la voix, Paris,

Seuil 1987)、無文字性についての文字のもつ意味がアフリカやアーロンバの視野の中で追求してきた人類学者ジャック・グディの『書かれたものと口から発せられたものの界面』(Jack Goody *The Interface Between the Written and the Oral*, Cambridge University Press, 1987)や、アフリカの語りの世界から出発して、オセアニアにおける語りと文字の導入の問題との比較を行なっている人類学者ルース・フィネガンの『文字性と口頭性』(Ruth FINNEGAN *Literacy and Orality*, Oxford, Blackwell, 1988)等も、この分野での一九八〇年代以降の注目すべき仕事だ。

口頭性というものの本質を、一方では声を発する行為にまで遡り、一方では文字性と対比させて探求するこのような研究の潮流は、「口承」「文芸の研究を標榜する私たちの學会によつてても研究の根底を問いつながる重要性をもつていて。とくに今度フランスで出たこの論文集『声の人類学のために』は、多方面の研究者の第一次資料に基づく個別研究の集成であり、私たちが具体的な現場研究をする上での、貴重な示唆にみやうこね。

CO) に属する口頭性研究センター(Centre de recherche sur l'oralité)の活動として毎月開かれている研究発表会での、一九八六年以降編集段階までの報告を基に、この論文集は作られている。全体は「様式と声」「働く声」対話する声の三部に分かれ、フランスの大家、中堅十五人の研究者や作家が寄稿している。以下順を追って簡単な紹介を試みたい。

第一部「様式と声」は、五つの論文から成る。まず、西アフリカのドゴン社会の言語人類学的研究で著名なジュヌヴィエーヴ・カラム・グリオールの「鼻音と死」がある。ドゴン族は、人間はのど(声帯)と口の諸器官で息を「紡いで」言葉にすると考えている。鼻と死の観念の結びつきは、ドゴン族だけでなく多くの民族に見出されるが、言葉における強度の鼻音化も、ドゴン族では死にかかわる言述に結びあわされており、このことは、ドゴンと同じマリに住むバンバラ族など他のアフリカ社会でも、また中米のハイティにも認められるという。次の「中世的様式とは何か」は、前述の中世史学者ズムトールによる論文で、中世的な朗唱において、テキストは声の表現や身振り表現などが構成する演技全体の

一部としてとらえるべきであるとする主張の、史料に基づく論証である。

言語学者イヴァン・フォナジーの「音声性格学の可能性」は、前述の『生きた声』でも話す声の三部に分かれ、フランスの大家、中堅十五人の研究者や作家が寄稿している。以下順を追って簡単な紹介を試みたい。

第一部「様式と声」は、五つの論文から成る。まず、西アフリカのドゴン社会の言語人類学的研究で著名なジュヌヴィエーヴ・カラム・グリオールの「鼻音と死」がある。ドゴン族は、人間はのど(声帯)と口の諸器官で息を「紡いで」言葉にすると考えている。鼻と死の観念の結びつきは、ドゴン族だけでなく多くの民族に見出されるが、言葉における強度の鼻音化も、ドゴン族では死にかかわる言述に結びあわされており、このことは、ドゴンと同じマリに住むバンバラ族など他のアフリカ社会でも、また中米のハイティにも認められるという。次の「中世的様式とは何か」は、前述の中世史学者ズムトールによる論文で、中世的な朗唱において、テキストは声の表現や身振り表現などが構成する演技全体の

一部としてとらえるべきであるとする主張の、史料に基づく論証である。

言語学者イヴァン・フォナジーの「音声性格学の可能性」は、前述の『生きた声』でも話す声の三部に分かれ、フランスの大家、中堅十五人の研究者や作家が寄稿している。以下順を追って簡単な紹介を試みたい。

第一部「様式と声」は、五つの論文から成る。まず、西アフリカのドゴン社会の言語人類学的研究で著名なジュヌヴィエーヴ・カラム・グリオールの「鼻音と死」がある。ドゴン族は、人間はのど(声帯)と口の諸器官で息を「紡いで」言葉にすると考えている。鼻と死の観念の結びつきは、ドゴン族だけでなく多くの民族に見出されるが、言葉における強度の鼻音化も、ドゴン族では死にかかわる言述に結びあわされており、このことは、ドゴンと同じマリに住むバンバラ族など他のアフリカ社会でも、また中米のハイティにも認められるという。次の「中世的様式とは何か」は、前述の中世史学者ズムトールによる論文で、中世的な朗唱において、テキストは声の表現や身振り表現などが構成する演技全体の

短い行数で要約することはできないが、言述と主題を組織するものとしてのリズムの面から、筆者が問題に迫ろうとしていることは、同じ問題に関心をもつ私にも共感できる。言語学者であり民族学者でもあるニコル・ルヴァルの論文は「バラワンの叙事詩吟唱の声」の記述で、フィリピンのバラワンの五つの異なる

女傭い、吝嗇、学校で文系より理系の学科が得意だったか等——を言わせる。声というものの、著しくとらえどころのない本性からして、このような探求は筆相学よりも大きい困難を抱えているといわなければならないとフォナジーは述べる。この種のテストにおいて、俳優によつて演じられた役の科白を用いて、C.N.R.S.の民族学者で、西アフリカのあと西インド諸島のグアドループの言語民族学的調査を行なつて、本書の編者の一人でもあるディアナ・レイユルマンの「死者のための歌」に働き、生命のために歌う——グアドループ島では、葬儀に集まる人の歌う歌が、農作業における共同労働に参加するときのものと同じであるにちがいない。ともあれ、声を問題にする上で、おもしろい研究方向ではある。詩人で、パリ第八大学で講壇に立つ言語学者でもあるアンリ・メショニックの「口頭性、ルティニック島での農作業歌」は、農耕牛に呼びかける形をとった、ミシシッピ・デルタのブルースを想起させる歌を主題にしようとする、理論的試みである。論の内容を

ゼールの論考である。音頭II一同の歌唱形式をとり、内容は人生についての省察や、村の逸話をもりこんだもので、筆者によれば、これはアンティール諸島の伝統的な民話に、音樂的領域で対応するものであるという。

「フランスの北方都市の美術学校で藝術をとどめ、エーヌの『横町の声』——街路のことばと見世物』は、中世にまで遡る主としてパリの歴史資料を基に、ヨーロッパの大都会の路上の芸人、物売りをはじめとする多様な声と見世物の諸相を簡潔にまとめている。とくにパリについては、興味深い資料が示されている。C.N.R.S.の民族音樂学者ジャック・シェローノは、「声の出し方、歌い方——聖歌隊の野卑な発話」と題する斬新な論考で、一九世紀フランスのカトリック教会聖歌の改革論者たちが、当時の地方教会の聖歌隊の歌い方を『野卑』として非難し、その发声法、唱法について改良の指示をしている文書を検討し、そこから逆に、当時の地方民衆の歌唱法の特徴を推測している。

ア・ヴィレラリブティの「ソボクレース」。⁸⁾ ピロクテー「テース」における声の賭けは、古代ギリシャの「クレオス」という「榮光」を中心とする多義的でしかし叙事詩にとって重要な概念が、声による朗唱を含んではじめて成立することを、ソポクレースの作品の分析を通して論じている。次の「祈りと典礼の日々——グレゴリオ聖歌と僧院生活」は、三十年間の僧院生活の経歴をもつ特異な作家アラン・リヴィエールの体験的論考だ。典礼を通してキリストの生涯の記憶と祈りが刻まれた日々と、グレゴリオ聖歌との、歴史を経ての動態的な相互関係、伝統の生成、多様化、洗練、変容等について、ネウマ記譜を用いたいくつかのクレゴリオ聖歌の事例を基に、分析がなされている。哲学者で民族音楽学者でもあるイエゴール・レチニコフは、「口頭伝承から読みとる西洋古代歌謡」で、キリスト教的表现を与えられて、四世紀以後一二世紀までヨーロッパに存続した古代歌謡は、それが支えていた口頭伝承とともに、フランスでは一九世紀末から二〇世紀はじめに消滅したが、近代ヨーロッパのものとは異なる音階や発声法をもっていたと思われる古代歌謡の実

体を探るのに、オリエントのキリスト教ニダヤ教の音楽、トルコやイランの宗教的音樂、インドの民間伝承さえもが参考になるだろうと述べている。

紙数が尽きたので端折るが、次の三篇は中米、西アフリカ、シベリアの三つの社会の、超常的な場における発話についての、いずれもユニークで興味深い事例研究である。すなわち、C.N.R.Sの言語学者オーロール・モノリベクランの「多声の独白——マヤの儀礼における言述」、同じくC.N.R.Sの言語民族学者マリ・ポール・フェリーの「仮面の声、精神の声」、シベリアのシャーマニズム研究者として有名な民族学者ロベルト・アマイヨンの「シベリアのシャーマニズムにおける他者の声、動物あるいは死者の声」である。

以上簡単にだが紹介してきたことからも窺えるように、この論集は声が提起する問題に、思いがけないような角度からのものも含めて、きわめて多様な切りこみ方をしている。まだ試論的な考察も多いが、それだけに

第三部「対話する声」には、六編の論文が収められている。CNR斯所屬の哲學者マリ

が、近代ヨーロッパのものとは異なる音階や発声法をもつていたと思われる古代歌謡の実

(パリ・ラルマッタン社刊行、三五三ページ)
(かわだ・じゅんぞう／東京外国语大学)